

だい しょう
第3章

ひさいち たす あ じれい
被災地での助け合い事例

ひさいち たす あ じれい
被災地での助け合い事例 (レスキューストックヤード)

しゅってん ねん がつ にち ひがしにほんだいしんさい たいけんしゅう
出典：2011年3月11日 東日本大震災 いのちの体験集

ひさいしゃ いちばんつた みやぎけんしちがはままちじゅうみん なま ことば
被災者が一番伝えたいこと ～宮城県七ヶ浜町住民の生の言葉～

とくていひ えいり かつどうほうじん はっこう
特定非営利活動法人レスキューストックヤード 発行 より

だれ きんじょ
【どこに誰がいるのかわかっているのはやっぱり近所さん】

じしん あと つなみ おも ぼうさいむせん つなみ じょうほう き
地震の後、津波はくると思っていました、防災無線から津波の情報が聞
と き取れなかったこと、チリ地震の後に自宅を嵩上げしていたこともあり、「ま
さかここまで来ないだろう」と家の片づけをしていました。しばらくして
つなみ く に いえ かた
「津波が来るから逃げろ!」と消防団員に言われ、ハッと我に返りました。

しょうぼうだんいん きんじょ からだ うご ひと ね ひと
そのとき、消防団員に「近所で体の動かない人、寝たきりの人はいない
か?」と尋ねられ、ふと近所のおばあさんの すがた のうり う
ねんかん じぶん ある ひとり く
年間、自分で歩くこともできない一人暮らしのおばあさん、ひょっとしてまだ
いえ
家にいるんじゃないか・・・?」と。

しょうぼうだん くるま わたし の あんない へ や
消防団の車に私も乗って案内し、いつもおばあさんがいる部屋をのぞく
か く さんらん なか ひとり ふる
と、家具が散乱している中で、一人ぶるぶると震えていました。

【家族での避難訓練への参加が避難行動に活かされた】

震災前から、地震が起きたら必ず津波が来ると考えており、毎年家族で地域の避難訓練に参加していました。ダウン症の娘に「こういうふうには逃げるんだよ」と、実際に見せて教えるためにも、訓練への参加は大切だと考えていました。

今回、家族みんなが約束通りの場所に避難できました。だから訓練は無駄ではなかったと感じるし、まじめに取り組んでいてよかったと思います。そして、いつも近所の人や民生委員に、娘がハンディを抱えていること、日中一人になる時間帯があることを伝え、何かあったときは手助けをお願いしたいことを伝えていました。

町営住宅の一階には一人暮らしのおばあちゃんも住んでいました。私が避難するときには声はかけたものの、返事がなかったので、そのまま避難しましたが、結局おばあちゃんは自宅で亡くなっていました。自分も逃げないといけない、家族がどうなっているかも分からない中では、人はパニックに陥ります。娘のことを頼んでいた近所の方も、「とても気になっていたんだけど、家族のことで精いっぱいでも何もできなかった。本当にごめんね」と後日泣きながら謝ってくださいました。私はこれだけ気にかけて下さったことをありがたく思いました。避難までにもう少し時間的な余裕があったなら、きっと声かけや手助けをして下さる方はいたと思います。

【家族、ご近所、運営スタッフによる見守りの多重構造が重要】

私は中央公民館と老人福祉センターの避難所運営を担いました。1週間後、避難所の女性たち主体の炊き出しが始まり、歯が悪い高齢者にはお粥、アトピー患者にはアレルギー除去食を提供し、みんなが食事を摂れるよう配慮しました。

トイレの問題は特に深刻でした。備え付けの洋式トイレは断水で汚物が溢れ、仮設トイレは屋外で移動が大変な上、全て和式でした。また、鍵の締め方が分からず使用中に扉が開いてしまったり、手すりがないため転倒する事故も発生しました。室内にポータブルトイレを設置しましたが、低すぎて手すりもないため、立つ・座る動作に支障が出ました。そこで、断水中でも屋内のトイレを使用できるように工夫しました。便器にゴミ袋をかぶせ、新聞紙と強固剤で汚物を処理しました。ただ、高齢者は処理方法を理解するのが難しかったので、スタッフがトイレ介助を行いました。

また、畳のある部屋を福祉避難スペースとし、寝たきりの高齢者と重傷者に入室してもらいました。10名の認知症高齢者は、状況をよく理解する家族やご近所の方に世話をしてもらいました。

施設内には医療団が常駐していましたが、家族や周囲に気兼ねして、体調がおかしいことを言い出せない人もいました。そのため、一日1回すべての部屋をまわり、全員に「おはよう」と声を掛けながら、目つきや顔色、唇の色を確認し、体調不良者の早期発見に努めました。

要援護者を連れての避難は本当に大変です。家族やご近所、運営スタッフによる見守りの多重構造が必要で、この目配り気配りが働く程、容態悪化を防ぎ、早期対応に繋がられるようになると思います。普段の訓練の中で、避難所でどんな問題が起こるのか、誰がどのように対応するのかを、地域でシュミレーションしておくことが大切だと思います。

【「持ちつ持たれつ」の関係で不便な生活も乗り越えられる】

2011年6月頃、仮設住宅に入居。避難所は、夜でも照明がこうこうと点き、人も多く、暖房の音も大きくて全く眠れませんでした。日中もガヤガヤしていて、昼寝もできず、避難所生活でリズムが崩れたのか、仮設住宅に入ってからもうまく睡眠がとれませんでした。

私は長距離移動には車いすが必要で、普段のちょっとした移動は松葉杖を使っています。仮設住宅は段差が多く、手すりが適切な位置になく、とても困りました。一人ひとり手すりが必要な位置は違います。私の場合、備え付けられた手すりはほとんど役に立たず、レスキューストックヤードの支援で希望に応じた場所に付けてもらうことで、トイレ・風呂・玄関など、家中は一人で自由に移動できるようになりました。

部屋が狭いのは不便もありますが、壁や家具に手をつきながら移動できたので、私にとっては良かった面もあります。とにかく、「人に頼まなければ動けない」という気後れが無くなったのでとても楽になりました。

私が住む仮設住宅は、7戸が連なって一棟の長屋になっています。地区が違う者同士が集まっているので、お互い気遣いながら3年を過ごしています。最初は挨拶程度でしたが、入居から1か月が経った頃、7戸が協力して家の前の駐車場の草刈をしたり、洗濯物を干す場所を作ったりするようになりました。今ではお隣さんがおかずを持ってきてくれることも。この近所付き合いがあったので、不便な生活を何とか乗り越えることができていると思います。「みんなで協力して元気に仮設を出よう!」とよく話しています。

しょうひん ちいき
【商品^{しょうひん}を地域^{ちいき}のみなさまに】

ちか すいさんかこうがいしゃ ひさい かこうがいしゃ ちか ひと しょうひん むりょう
近くの水産加工会社が被災したので、加工会社が近くの人に商品^{しょうひん}を無料で
ていきょう
提供^{ていきょう}した。

こま たが
【困^{こま}っているときはお互いさま^{たが}】

つなみ き き きに ひとひと う い ちいき ひとひと
津波が来たので着のみ着のまま逃げてきた人々に、受け入れた地域の人々
こめ た ていきょう よるす
がお米^{こめ}を炊いておにぎりなどを提供^{ていきょう}しその夜過^{よるす}ごした。

ちから あ
【みんなで力^{ちから}を合わせて^あ】

ひなんじょ こま みな ちから あ つち ほ
避難所^{ひなんじょ}でトイレが困^{こま}ったが、皆^{みな}で力^{ちから}を合わせて土^あを掘^{つち}ったりした。トイレ
みな つく
を皆^{みな}で作^{つく}った。

だれ
【もくもくと誰か^{だれ}のために】

ぶじ さぎょうじょ ひとひと つく おな
無事^{ぶじ}だった作業所^{さぎょうじょ}の人々はひたすらドーナツなどをつくり、いつもと同じよ
うに過^すごしたとのことでした。作^{つく}ったものを避難所^{ひなんじょ}に配^{くば}っていたりしたらしいです。